

## 序

**私**のキャリアで最も悲しい日は、一本の電話から始まった。研究を行っていたオランダの王立バーガース動物園で、大好きだったチンパンジーのレウトが二頭のライバルに襲われ、瀕死の状態だという。自転車で駆けつけると、レウトは血だまりの中に座り、精根尽き果てた様子で頭を夜間用ケージの格子にもたせかけていた。いつもは超然としているのに、私が頭をそっと撫でると、なんとも深い溜め息を漏らした。だが、もう手遅れだった。レウトはその日のうちに、手術台の上で息を引き取った。

チンパンジーの男〔本書では著者の意向により、ほとんどの場合、類人猿について「オス」と「メス」の代わりに「男」と「女」という言葉を使う。詳しくは、「訳者あとがき」を参照のこと〕どうしの抗争は、過熱して殺し合いになることがある。そして、それは動物園に限ったことではない。野生の世界でも、その種の権力闘争のときに高位の男が殺されたという事例が、今や一〇件余り報告されている。男たちはトップの座を勝ち取ろうと立ち回り、状況を見ながら同盟を結んでは破棄し、裏切り合い、攻撃を企む。そ

う、企むのだ。なぜなら、レウトへの暴行が起こったのは、三頭の成熟した男がコロニー「集団。動物園のもののように、飼育環境下の集団を指すことが多い」の残りのチンパンジーたちから引き離されていた夜間用の区画であり、それは偶然ではなかったからだ。この世界一有名なチンパンジー・コロニーが、その区画の外にある木々の生い茂った大きな島に出ているなら、違った展開になっていたかもしれない。チンパンジーの女たちは、男のライバルどうしが衝突すれば、ためらうことなく仲裁に入る。ママという名のアルファメス「最上位の女／メス」は、男たちが権力を巡る駆け引きを行なうのをやめさせることはできなかったものの、流血沙汰は許さなかった。もしママがあの場合に居合わせたら、味方呼び集め、割って入っていたに違いない。

レウトのあまりにも早過ぎる死に、私はひどく心を乱された。彼はじつに友好的なチンパンジーであり、そのリーダーシップの下で、コロニーは仲良く平和に暮らしていたのだ。だが私は、動揺したのに加えて、心底がっかりもした。それまで目撃した闘いは、いつも和解で終わっていたからだ。どの小競り合いのあとにも、ライバルどうしがキスして抱き合い、何の問題もなく不和を解消することができていた。いや、私はそう思っていた。チンパンジーの大人の男は、ほとんどの時間、友達どうしのように振る舞う。グルーミング（毛づくろい）をし合い、喧嘩ごっこに興じる。だが、あの晩の悲惨な出来事は、事態が手に負えなくなりうることを、そして、普段は親しそうな男たちも意図的に殺し合いかねないことを、私に教えてくれた。フィールドワーカーたちも、森の中での凶行を、同じような調子で記してきた。そうした凶行は十分計画的なので、「謀殺」という言葉がふさわしく思える。

チンパンジーの男が見せる激しい攻撃性に相当するものは、女の間にも存在する。ただし、女の怒

りを引き起す状況は、まったく違う。どれほど大きな男でも知っているとおり、どの母親も子供に少しでも手出しされれば猛然と怒りだす。何者も恐れず、猛々しくなるので、手のつけようがない。類人猿の母親が子供を守るときの獍猛さときたら、自分の身を守るときよりも凄まじい。母親が子供を守るのは、哺乳類の普遍的な特性なので、冗談の種にされるほどだ。一例を挙げよう。二〇〇八年のアメリカ大統領選挙で副大統領候補だったサラ・ペイリンは、「ママ・グリズリー」を自称した〔グリズリーはハイイログマの別称で、ハイイログマのメスは、我が子をよく守ることで知られている〕。漫画家のゲイリー・ラーソンはそれが話題になったことを念頭に置き、風刺漫画を描いた。ブリーフケースを提げたビジネスマンがエレベーターに乗り込むと、奥に大きなクマと小さなクマが立っている。キャプションには、こうあった。「仕事で頭がいつぱいのコンロイは、エレベーターに足を踏み入れたときに悲劇に見舞われた。グリズリーのメスとその子グマの間に割って入ってしまったのだ」

かつて、タイのジャングルには、林業を手伝わせるために野生のゾウを捕まえていた、「フアンデイ」と呼ばれる猟師たちがいた。彼らが何よりも恐れていたのは、長い牙を生やしたオスを罾で捕まえることではなかった。縄で捌め捕られた大きなオスのゾウなど、危険と言ってもたかが知れていたからだ——母親に聞こえる場所で幼い子ゾウを捕まえたときに比べれば。ずいぶんと多くのフアンデイが、激怒した母親ゾウに命を奪われてきた。

私たちの種では、母親が我が子を守るのと言わずもがななので、ヘブライ語聖書によれば、ソロモン王はそれを抛り所にしたという。ある赤ん坊の母親だと言う人が二人現れたとき、王は剣を持ってこさせた。そして、赤ん坊を真っ二つにさせよう、そうすれば半分ずつ与えられるから、と持ちかけ

た。女の一人はその提案を受け容れたが、もう一人は異を唱え、赤ん坊を相手の女に与えてほしい、と懇願した。それで王には、どちらが本物の母親かがわかった。イギリスの推理小説作家のアガサ・クリステイーが書いているように、「我が子に対する母親の愛に並ぶものはこの世にまたとない。その愛は、法も情けも知らず、あらゆるものに敢然と立ち向かい、行く手を遮るものはすべて、容赦なく打ち砕く」。

私たちは、なんとしても我が子を守ろうとする母親を讚美する一方、人間の男の好戦性には眉をひそめる。男は大人も子供も、対立を煽り、虚勢を張り、弱みを隠し、危ない橋を渡ることが多い。そんな男を誰もが好ましく思うわけではない。「伝統的な男らしさのイデオロギー」が男の行動の原動力となっている、と専門家が言うとき、それは非難であって讚辞にはほど遠い。アメリカ心理学会は二〇一八年のある文書で、このイデオロギーを、「反女性性、達成、脆弱な外見を露呈することの忌避、冒険とリスクと暴力」を軸とするものと定義した。このイデオロギーから男を救い出そうとする同学会の試みは、「有害な男らしさ」についての議論を再燃させたが、典型的な男の行動を一律に非難することへの反発も招いた。

男と女の攻撃性のパターンがこれほど違う評価を受ける理由は、簡単に見てとれる。男のパターンだけが社会の中で問題を引き起こすからだ。レウトの死にぞつとした私は、男の競争を無害な気晴らしとして描きたくはない。とはいえ、それがイデオロギーの産物だなどということがあるだろうか？そこには途方もない思い込みがある。私たちは自分自身の行動の主であり計画者である、という思い込みだ。もしこれが正しかったなら、人間の行動は他の種の行動と一線を画すことにならざるをえな

いのではないか？　だが、そんな違いはないに等しい。ほとんどの哺乳類では、オスは地位や縄張りのために奮闘するのに対して、メスは全力で子供を守る。そうした行動を是とするか非とするかにかかわらず、それがどう進化してきたかを見てとるのはわけもない。どちらの性にとっても、それぞれの行動は昔から常に、自分の遺伝子を残すためのカギなのだ。

イデオロギーなど関係ない。

## 動

物と人間の行動における性差は、人間のジェンダーにまつわるほぼすべての議論の核心にある。さまざまな疑問を提起する。男と女の行動の違いは自然のものか、人為的なものか？　両者は本当はどれほど違うのか？　ジェンダーは二つしかないのか、それとも、もつとあるのか？

だが、このテーマに飛び込む前に、私がそれに興味を持っている理由と、自分の立場をはっきりさせておきたい。本書では、霊長類として人間が受け継いだものを説明することで、既存のジェンダー格差を容認するつもりはないし、私は現状が万事問題なしだと考えているわけでもない。現在、男女は平等ではないし、人々の記憶にあるかぎり、ずっとそうだったことは認める。私たちの社会でも、他のほとんどの社会でも、女が割を食う。女は、教育を受ける権利から参政権まで、そして、合法的な妊娠中絶から同一賃金まで、一つひとつ進歩を勝ち取ってこなければならなかった。これらの進歩はけっして些細なものではない。最近ようやく確保できた権利もあれば、依然として阻まれている権利もあるし、達成されたものの、新たな攻撃にさらされるようになった権利もある。私はそのすべて

がひどく不公平だと思ひ、自分はフェミニストだと考えている。

女の生まれながらの能力に対する蔑視は、西洋では古くからのもので、少なくとも二〇〇〇年は時代をさかのぼる。この蔑視に基づいて、ジェンダー不平等はずっと正当化されてきた。たとえば、十九世紀ドイツの哲学者アルトゥール・ショーペンハウアーは、女は生涯を通じて子供のままであり、現在を生きるのに対して、男には先のことを考える能力があると思つていた。やはりドイツの哲学者のゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲルは、「男性は動物に相当し、女性には植物に相当する」と考えた。ヘーゲルがどういふつもりだったのか、私に訊かれても困るが、イギリスの道徳哲学者メアリー・ミッヅリーが指摘しているように、女のこととなると、西洋思想の巨人たちは途方もなく馬鹿げた考えを述べてきた。いつもなら意見が分かれるのに、それがいっさい見られなかった。「フロイト、ニーチェ、ルソー、ショーペンハウアーがお互いや、アリストテレス、聖パウロ、聖トマス・アクイナスと心から同意する事柄が多かるうはずもないが、女性に対する彼らの見方はこの上なく近かつた」

私が敬愛するチャールズ・ダーウィンさえもが、この風潮を免れなかつた。アメリカの女権擁護論者キャロライン・ケナードに宛てた手紙の中で、ダーウィンは女についての意見を述べている。「女性が男性と知性で肩を並べるようになるのには、遺伝の法則に由来する非常な困難があるように、私には思われる」

こうした見解はすべて、話題にされた知性の対比が教育格差でたやすく説明できた時代のものなのだから、いやはや。私はダーウィンの言う「遺伝の法則」に関しては、次のようにしか述べようがな

い。これまでのキャリアを動物の知能の研究にすべて捧げてきたが、両性間の違いにはまったく気づいたためがない、と。どちらの性にもずば抜けた才能を持つ個体もいれば、それほどでもない個体もいるが、私のものも含めた何百もの研究で、認知能力の性差はまったく見つかっていない。霊長類のオスとメスの行動の際立った違いはいくらでもあるものの、両者の心的能力は足並みを揃えて進化してきたに違いない。私たちの種でも、数学の能力のように、従来は一方の性と結びつけられていた認知能力の領域でさえ、十分なサンプルサイズで調べてみると、違いが見られないことがわかった。一方の性が心的能力の面でもう一方よりも優れているという考え方そのものが、現代科学ではまったく支持されていない。

続いて片づけてしまふべき問題は、私たちの仲間の霊長類たちに対する型どおりの見方であり、これはときおり、人間社会の不平等を擁護するために使われる。オスのボスザルがメスたちを「所有」しており、メスは赤ん坊を産み、ボスの命令に従いながら一生を送る、と思われていることが多いが、この見方が広まった大きなきっかけは、一世紀前に行なわれたヒヒの研究だった。のちほど説明するとおり、この研究は大きな問題をいくつも抱えており、そこから怪しげなメタファーが生まれた。不幸にも、そのメタファーは逆棘さかどけがついた矢のように一般大衆の頭に突き刺さり、以後、それが間違っていることを示す情報がどれほど積み重なっても、抜き取ることができていない。男／オスの優位は自然の秩序であるというこの考え方は、二〇世紀に多くの人気作家によって繰り返し宣伝された。その後、アメリカの精神医学者アーノルド・ルドウィグは、『山の王 (King of the Mountain)』と題する二〇〇二年の著書で、依然として次のように主張している。

大多数の人間は、集団生活を統治する単一の支配的な男性を必要とするように、社会的、心理的、生物学的にプログラムされている。そして、そのプログラミングは、ほぼすべての類人猿社会の営まれ方と符合している。

この、男／オスのボスによる支配は必然であるという考え方が間違っていることを、読者に気づいてもらうのが、本書での私の目的の一つとなる。この考えの発端となった先ほどの研究は、ヒヒという、私たちとあまり近くない種を対象としていた。私たち人間は、ヒヒのようなサルではなく、類人猿（尾のない大型の霊長類）の小さな科に属している。人間に最も近い大型類人猿を研究すると、もっと微妙な構図が浮かび上がってくる。その中では、男は世間で思われているほど支配権を行使していない。

霊長類のオスが弱者を虐待する場合はあることは否定のしようがないものの、オスが攻撃性と体格の優位性を獲得したのは、メスを支配するためではなかったことにも気づくといえよう。オスは、メスを支配するために生きているわけではない。生態学的な必要性を考えると、メスは完璧な大きさに進化した。メスの体は、採集する食べ物や、移動量、育てる子供の数、避ける捕食者などを考慮すると、最適だ。この理想的な大きさからオスが逸脱するように進化したのは、オスどうしでもっとよく闘えるようになるためだった。オスは競争が激しいほど、堂々とした体格になる。ゴリラのように、いくつかの種では、男／オスは女／メスの二倍も大きい。オスの闘争の主眼は、いっしょに子孫を残

してくれる相手に近づくことだから、メスを害したり、食べ物を奪ったりすることは、けっしてオスの目的ではない。実際、ほとんどの霊長類のメスは、たつぷり自主性を享受し、一日中、自分の食べ物を探し回り、仲間とつき合う一方、オスはメスの生活にとつて端役にすぎない。典型的な霊長類社会は本質的に、長老格のメスたちが運営する、メスの血縁ネットワークだ。

『ライオン・キング』が封切られたときにも、やはり私たちはオスの支配が必然だという見方を目の当たりにした。この映画では、オスのライオンがボスとして描かれている。ほとんどの人は、王国をそれ以外のかたちで思い描くことができないからだ。シンバ（次の王となることを運命づけられた子ライオン）の母親は、役らしい役は演じない。ところが、たしかにライオンのオスはメスよりも大きくて強いものの、群れの中では中心的な地位は占めない。群れは、本質的にはメスの連帯で成り立っており、狩りも子育ても、その大半をメスたちが行なう。ライオンのオスは群れに数年とどまったあと、新入りのライバルに追い出される。ライオンにかけては世界でも一流の専門家のクレイグ・パッカーは、「メスこそが中心です。群れの要<sup>かなめ</sup>であり、核心です。オスは、やって来ては、また去っていきま<sup>す</sup>」と言っている。

人間を他の種と比較するにあたって、大衆向けのメディアは現実の上っ面だけを取り上げる。ところが、掘り下げてみると、まったく違う現実が明らかになることがある。そこにはかなりの性差が反映されているかもしれないが、それは私たちが予想しているものとはかぎらない。そのうえ、多くの霊長類は私が「ポテンシャル」と呼ぶものを持っている。ポテンシャルとは、稀<sup>まれ</sup>にしか発揮されない能力や、目につきにくい能力のことを指す。その好例がメスのリーダーシップであり、バーガース動

物園で長年アルファメスの座にあったママのことは、前作『ママ、最後の抱擁』で説明したとおりだ。ママは喧嘩の結果で測定したら、トップの男たちよりも序列が低かったとはいえ、社会生活の絶対的な中心だった。最年長の男も、トップの男たちよりは位が低かったが、やはりママに劣らず、中心的な存在だった。これら二頭の高齢のチンパンジーがいつしよになって大きなコロニーをどのように取り仕切っていたかを理解するには、身体的な優位性以上のものに目を向け、誰が重要な社会的決定を下すのかに気づく必要がある。政治的な権力は、身体的優位性と区別しなければならぬ。人間の社会では、権力と筋力を混同する人はいないし、両者の違いは他の霊長類にも当てはまるのだ。<sup>12)</sup>

霊長類のオスの持つ子育ての能力も、ポテンシャルの一種だ。母親が死に、孤児が突然、助けを求めて哀れっぽく鳴きだしたときに、そのポテンシャルが垣間見えることがある。野生の世界では、チンパンジーの大人の男が幼い孤児を養子にし、ときには何年も、優しく面倒を見てやる例が知られている。男は、幼い養子がついてこられるように移動の速度を落とし、その子がはぐれたら捜し、どんな母親にも劣らぬほど一生懸命守ってやる。科学者は典型的な行動に重点を置く傾向があるので、私たちはこうしたポテンシャルについて、いつもじつくり考えるわけではない。それでも、私たちは変化する社会に生きていて、私たちの種にできることの限度が試されているのだから、霊長類のオスの持つ、子育てなどのポテンシャルは人間のジェンダー・ロール〔六三ページの用語一覧を参照のこと〕にも関係がある。したがって、他の霊長類との比較から、自分自身について何が学べるかを見ているのは、まったくもって道理に適っている。<sup>13)</sup>

進化の観点からの説明に疑問を抱き、同じ原則が私たち人間には当てはまらないと思っ

でさえ、自然淘汰にまつわる、ある基本的真理は認めざるをえないだろう。現在地上に存在する人のうち、生き延びて子孫を残してくれた祖先を持たない人は、一人としていないはずだ。私たちの祖先はみな、子供をもうけて首尾良く育て上げるか、他者に子育てを手伝ってもらった。この原則に例外はない。なぜなら、そうすることができなかつたら、誰の祖先にもなれないからだ。

彼らの遺伝子は、遺伝子プールに残らない。

## 現代

現代社会は、権力と特権に見られるジェンダー差を正さなければならぬ。ただし、女だけではこれは成し遂げられない。男女のジェンダー・ロールは緊密に絡み合っている。男と女が同時に変わる必要がある。そうした調整の一部は、すでに始まっている。若い世代が、私の世代とはずいぶんと違った物事のやり方をしているのを見かける。たとえば、男は前よりもずっと子育てにかかわっているし、女は男ばかりだった仕事に進出している。この調整をさらに進めるには、男たちにも加わってもらうことだ。だから私は、世の中の悪いことはすべて男のせいにするような、何でもひとくくりにする論調には腹が立つ。男性性の特定の表現を「有害」とするのは、私に言わせればフェミニズムではない。一方の性全体に汚名を着せて何になるというのか？ アメリカの俳優メリル・ストリープに私は賛成だ。彼女はそんなことは無用なのを見てとって、こう述べている。「私たちはあれやこれやを有害な男らしさと呼んで、男たちを傷つけていますけど、女もめちゃくちゃ有害になることがあります。……世の中にいるのは、有害な男とか、有害な女とかではなく、有害な人々です」

日常生活での人間のジェンダー差の起源を知るのにはほぼ不可能だ。なにしろ、私たちの文化は男女両方に、たえず圧力をかけているからだ。誰もが歩調を合わせ、男らしさと女らしさの規則に従うことになっている。こうして私たちはジェンダーを生み出し、ジェンダーは生物学的な性に取って代わったのだろうか？ いや、これですべてが説明できるはずがない。他の霊長類は人間のジェンダー規範の対象ではないにもかかわらず、しばしば人間と同じように振る舞うし、人間も彼らと同じように振る舞うことがよくある。彼らの行動も社会規範に従っているのかもしれないが、それらの規範は人間の文化ではなく彼らの文化に由来するはずだ。だから、彼らの行動と人間の行動の類似は、両者が共有する生物学的特質の存在を示唆している可能性のほうが高い。

他の霊長類は人間が我が身を映す鏡であり、そのおかげで、私たちはジェンダーを今までとは違う目で見ることができる。そうはいっても、彼らは人間ではないから、比較対象を提供してくれるのであって、私たちが見習うべき手本ではない。わざわざそう断るのは、事実に基づく説明が規範を示すものと解釈されることがあるからだ。だが、両者は異なる。人は、他の霊長類に関する説明について考えるときに、その霊長類を自分に重ねずにはいられない。自分がよしとするかたちで相手が振る舞えば称讃し、見るのも忌まわしいことをすれば腹を立てる。私は両性の関係が根本的に異なる二種類の類人猿を研究しているので、彼らについて講演しているときには、聴衆がそのような反応を示せばただちに気づく。人々は私の説明を聞くと、私が内容を是認しているかのように反応することがある。チンパンジーについて論じると必ず、私が男の力と残忍さの熱狂的な支持者に違いないと思ひ込む。人間の男もチンパンジーの男のように振る舞えば素晴らしい、と私が考えているかのようにだ！ そし

て、これまた類人猿のボノボの社会生活を紹介しますと、聴衆は私がエロティシズムと女による支配をおおいに好んでいと確信する。実際には、私はボノボとチンパンジーの両方が好きだし、どちらにも同じぐらい心を奪われている。両者は、私たちの異なる面を明るみに出してくれる。人間は、チンパンジーとボノボの特徴を少しずつ備えている一方で、数百万年をかけて独自の特性も進化させてきた。

人々が腹を立てる例を示すために、私がまだ若く、バーガース動物園で研究していたチンパンジーについて、そこで講演していた頃までさかのぼろう。聴衆は、パン職人の組合員から、警察学校の学生、学校の教員や子供まで毎回違った。みな私の話を楽しんでくれたが、ある日、女ばかりの弁護士の一団を迎えたときは事情が違った。彼女たちは私が伝えようとしていた内容にはつきりと不満を示し、私のことを、当時広く使われただばかりの言葉を使って、「性差別主義」だと言う。だが、私は人間の行動についてはひと言も口にしていないのに、どうしてそんな結論を引き出すことができるのか？

私が説明したのは、チンパンジーの男と女の違いだった。男は派手なこけ威しのディスプレイ（誇示行動）を行なうが、これは権力に対する彼らの欲求を示している。彼らは戦略家で、いつも次の一手を考えている。一方、女はグルーミングをしたり、仲間とつき合ったりしてほとんどの時間を過ごす。他のチンパンジーとの良好な関係や家族に焦点を合わせる。私は、コロニーでの最新のベビーブームの写真も誇らしげに見せた。だが、弁護士の一団は、類人猿の赤ん坊に目を細める気分ではなかったようだ。

彼女たちは講演のあと、なぜ私はオスがメスを支配していると、それほど自信が持てるのか、と尋ねた。その逆ではないという保証がどこにあるのか？ 支配について、私が思い違いをしてはいまいか、と彼女たちは言った。いつもオスが争いに勝つものを見てきたそうだが、実際には、勝つたのはメスだったのだろう、と。それまで何千時間もかけて、来る日も来る日もチンパンジーと過ごしてきた私を、チンパンジーとゴリラの見分けもつかないような人々が正そうとするとは！ 私の研究分野には女の専門家も大勢いるが、チンパンジーは男優位という説明以外、聞いたためしがない。ただしそれは、身体的な優越性にしか当てはまらず、ごく限られたものだが、それでも大切だ。チンパンジーの男は女よりも体重があり、ボデイビルダーのような体つきをしていて、腕や肩が発達しており、首も太い。ヒョウの牙と見紛うほどの長い犬歯という武器も持っているが、これは女にはない。女は男にとっくい太刀打ちできない。唯一の例外は、女が団結したときだ。

その日の講演に続いてチンパンジーたちの島を案内している間に、弁護士の一団は私の主張を裏づける事例をいくつか自らの目で見て、少し考えを変えた。だが、機嫌は少しも良くなかなかつた。

後年、ボノボの研究をするようになって、彼らについて講演すると、逆のことが起こった。チンパンジーとボノボはともに類人猿であり、どちらも遺伝的に人間にきわめて近いが、行動は驚くほど違う。チンパンジーの社会は攻撃的で、縄張りがあり、男が序列の上位を占める。ボノボは平和的で、セックスが大好きで、女が優位だ。二種類の類人猿でこれ以上異なりようがあるだろうか？ 人間の仲間の類人猿についてもっと知ればジェンダーに関するステレオタイプが強まるに決まっている、という考え方が誤りであることを、ボノボは証明してくれる。ボノボのことを、「争わずに愛を交わす」

霊長類と呼んだ科学者である私は、彼らについて書いた最初の一般向けの小論を、次のような一文で始めた。「女が男との平等化の達成を目指している歴史上の転機に、科学は後れ馳せながらフェミニスト運動への贈り物を見つけ出した」。これは、そうとう昔の一九九五年のことだ。

聴衆はボノボに拍手喝采を送る。ボノボをおおいに気に入る、生物学が暗い印象を与えるときに、ボノボが光を投げしてくれるように感じる。小説家のアリス・ウォーカーは、『父の輝くほほえみの光で』（柳沢由美子訳、集英社、二〇〇二）を私たちとボノボとの緊密な近縁関係に捧げたし、「ニューヨーク・タイムズ」紙のコラムニストのモーリン・ダウドは、政治評論にボノボの平等主義の精神への讃辞を織り込んだことがある。ボノボは、「政治的に正しい霊長類」と呼ばれてきた。男女間の優位性の逆転と、信じ難いほど多様な性生活のためだ。ボノボは、大人の男と女だけではなく、あらゆる組み合わせでセックスをする。私は、ヒッピーのようなこの人間の近縁種についていつも喜んで語るが、進化上の比較は、希望的観測によって歪められてはならないと思う。動物界を見回して、いちばん気に入った種を勝手に選び取るような真似は、けっしてしてはならないのだ。

人間に同じぐらい近い類人猿の近縁種が二つあるのなら、両性間の関係についての考察にとつて、両者は等しく重要だ。だから本書は、両者をともに重視する（ただし、科学界ではチンパンジーのほうがずっと前から知られているし、詳しく研究されてきたが）。サルのように人間とはもともと離れている霊長類には、チンパンジーとボノボに対してほど注意を向けないことにする。

エンダー差というテーマは、どうしても感情を掻き立てる。それは、誰もが強固な意見を持つている領域だが、動物に関して、私たちはそういうものには馴染みがない。霊長類学者は是非を判断しないように努める。それがいつもうまくいくわけではないけれど、行動を善や悪に分類することはけつてない。研究では解釈を行なうし、それは避けられないといえ、私たちがオスの行動を指して「不快な」といった言葉を使ったり、特定の種のメスを「意地悪」呼ばわりしたりするのを耳にすることはないだろう。私たちは、行動をあるがままに受け容れる。動物の研究者の間では、この態度には長い伝統がある。カマキリのオスが交尾中にメスに頭を食べられてしまっても、誰もメスを責めたりしない。同様に、同じ理由から、私たちはサイチョウのオスを非難することもない。オスは泥を運んできて、メスはそれを使って自らを巣の中に閉じ込め、何週間も過ごすのだが。私たちは、なぜ自然はそうなっているのかを考えるだけだ。

霊長類学者は、社会も同じように眺める。行動の望ましさについては気にせず、できるかぎり正確にその行動を記述しようと試みる。それは、イギリスの動物・植物学者でテレビパーソナリティのデイヴィッド・アッテンボローが、私たちの種の求愛儀式のナレーターを務めるという、パロディ動画のようなものだ。カナダの酒場で男子学生たちがビールをがぶ飲みしている場面に、アッテンボローのナレーションが入り、彼の穏やかな声が独特の調子で語る。「メスたちの匂いが濃厚に漂っています」。そして、「どのオスも、自分がどれほど強く、どれほど利口かを見せつけようとしています」。その動画は、「勝者」が女の一人とベッドにいる場面でクライマックスを迎える。そのとき主導権を握っているのは女だ。

これは性差別主義なのだろうか？ それぞれの性に特有の行動にひと言でも触れれば、政治的姿勢を示すことになるとしても信じていないかぎり、そうはならない。私たちが生きている今の時代には、性差がいたるところに見られるかのようになり、それを徹底して誇大に宣伝する人もいれば、性差が無意味であるような物言いをして、それを拭い去ろうとする人もいる。前者は、空間記憶や善悪の判断、その他何であれ、わずかな差異に出くわすたびに、やたら大げさに騒ぎ立てる。彼らの結論はしばしばメディアによつて増幅され、どちらかの性に有利な数パーセントの差異が、黒か白かの違いに変えられてしまう。男性と女性の違いについての意見はすべて割り引く。「私たち全員に当てはまるわけではない」とか、「環境の産物だ」とか主張する。彼らのキーワードは「社会化」であり、「男性は競い合うように社会化されている」とか、「女性は他者の面倒を見るように社会化されている」とか言う。彼らは、行動の違いが何に由来するかを知っている、それが断じて生物学的なものではないことはわかっている、と称する。

後者の立場を早くから擁護した人の一人が、アメリカの哲学者ジュディス・バトラーで、彼女はジェンダーは単なる人為的な概念にすぎないと考えている。大きな影響力を持つことになる一九八八年の論文で、彼女は次のように述べた。「ジェンダーは現実のものではないので、ジェンダーにまつわるさまざまな行為がジェンダーという概念を生み出す。そして、これらの行為がなければ、そもそもジェンダーなどまったく存在しない」。これはまた極端な立場であり、私には同意できかねる。彼女がどう言おうと、ジェンダーは有用な概念だと思う。どの文化にも男女のそれぞれに別個の規範や習

慣や役割がある。ジェンダーは、言わば学習によって身につけたメッキであり、生物学的な意味での女を社会・文化的な意味での女に、生物学的な意味での男を社会・文化的な意味での男に変える。私たちは間違いなく芯まで社会的な生き物なのだ。私はさらに一歩進めて、ジェンダーの概念は他の霊長類にも当てはまるかもしれない、とさえ主張したい。類人猿は一六歳前後で大人になる。だから、他者から学ぶ時間はたっぷりある。もし、これで彼らのそれぞれの性に特有の行動が変わるのなら、彼らの場合にもジェンダーについて語るべきだろう。

ジェンダーという概念は、トランスジェンダーの男や女のように、生物学的な性と一致しないアイデンティティにまで及ぶ。また、解剖学的な性や染色体の性が分類しにくいときや、本人が自分をどちらか一方の性と見なしていないときなどもある。それでも、大多数の人にとつて、ジェンダーと性是一致する。この二つの用語は、意味は違うものの、分ち難い。だから、ジェンダー差の考察には、自動的に性差が取り込まれ、その逆もまた真なのだ。

科学は長い間、性差を無視していたが、状況は変わり始めている。性差を無視するという怠慢が医療に害を及ぼしてきたのがその一因だ。<sup>(18)</sup>かつて女は、男と同じように診断され、治療されていた——小柄な男であるかのように。「言うなれば、女性是不完全な男性だ」とアリストテレスが述べて以来、医学は男の体を参照基準としてきた。何であれ男性向けに開発された医薬品は、投与量を減らしさえすれば女にも使えろと考えられていた。<sup>(19)</sup>

だが、男女の体は断じて同一ではない。違いの一部は、単に体の構造上のものだ。たとえば、女は自動車事故で男よりも重傷を負いやすい。それは骨密度の差が原因かもしれないし、自動車業界が依

然として男の体に基づく人体模型を使つて衝突試験を行なつてゐるからかもしれない——男の体は、女の体とは重さの配分が違うというのに。<sup>20</sup> 違いはそれぞれの性特異的な症状（子宮、乳房、前立腺に関連したもの）や、その他の健康上の脆弱性にまで及ぶ。アメリカの国立衛生研究所は二〇一六年、自国の医学者たちに、研究には常に両性を含めるように求めた。「生物学的変数としての性に関する国立衛生研究所の方針」は、マウス、ラット、サル、人間など、脊椎動物を網羅している。多くの疾患は性別による偏りがある。たとえば、女のほうが男よりもアルツハイマー病や紅斑性狼瘡（こうはんせいろうそう エリテマトーデス）、多発性硬化症になりやすい。一方、男はパーキンソン病や自閉スペクトラム症になりやすい。全体として、女のほうが男よりも丈夫で長生きする。この違いは、ほとんどの哺乳類で見られる。そして、バトラーの「ジェンダーという概念」とは無関係で、生まれたときの性別次第だ。<sup>21</sup>

霊長類学者には、性別を軽視する理由がない。私はこれまで霊長類学の学会で一〇〇〇回は講演を聴いたに違いないが、誰かが「ご承知のように、私はずつと森でオランウータンのオスとメスを追つてきました、彼らの行動は著しく似通つてゐるのです」などと言うのを耳にしたことは一度もない。ほとんどの霊長類では、行動の性差はあまりに明白なので、そんな発言をする人は笑い物になることだろう。そのうえ、私たちはそうした違いが大好きだ。それで生計を立ててゐるようなものだから。違いがあるからこそ、霊長類の社会生活はこれほど興味を惹く。オスにはオスのもくろみがあり、メスにはメスの狙いがある。そして、両者の相互作用を突き止めるのが私たちの仕事だ。オスとメスの利害が食い違ふこともあるが、どちらも相手抜きでは進化のレースを勝ち抜けないので、両者の目指すものは必ずどこかで重なり合う。

だからといって、私の比較から簡単に答えが導かれるわけではない。性差とされるもののうちには、確かめようがないことが判明したものもあるし、現に存在している差でも、思っていたほど単純ではないことが多い。霊長類を背景に人間という種を眺めるにあたって、私は人間の行動についての豊富な文献を活用していく。取捨選択はするし、どちらかという第三者の立場でそうする。私の一番のバイアスは、人間の自己報告を信用しないことだ。社会科学では人々に質問をして、本人に答えさせる手法がもてはやされるようになったが、私は、まだ実際の行動を試したり観察したりしていた初期の頃に戻ることを好む。たとえば、子供たちが学校の庭でどんなふう遊ぶかや、運動選手が勝ったり負けたりしたときどう反応するかを調べるほうが好きだ。人々の行動のほうを、本人が自分について言うことよりも、はるかに多くの情報を提供してくれるし、ずっと正直だ！ それに、霊長類の行動とも比較しやすい<sup>2)</sup>。

人間のジェンダー関係について考察するにあたり、重要な問題をいくつか対象外とする。霊長類の観察が私の出発点だから、それと関連した人間の行動だけを考えるので、動物には相当するものがない領域は脇に置いておくことにする。たとえば、経済格差や家事労働、教育を受ける機会、服装に関する文化的な決まり事などだ。私の専門知識は、こうした問題を解明する役には立たない。

シン  
エンダー平等に向けた努力が成功するかどうかは、現実の性差あるいは想像上の性差にまつわる果てしない議論の結果にはかかっていない。平等であるためには、当事者が類似している必

要はないからだ。人々は、違っていてもなお、まったく同じ権利と機会を与えられて当然だ。だから、人間と他の霊長類の両方で両性がどう違うかを探究しても、不平等な現状が正当であるということにはけっしてならない。平等性を高める最善の方法は、人間の生物学的特質をうやむやにしようとする代わりに、それについてもっと学ぶことだと、私は心から信じている。実際、こうした議論ができるのも、社会を根本的に変えた、小さな生物学的発明のおかげにほかならないのだ。

排卵（卵巣からの卵子の放出）を妨げる、エストロゲン・プロゲステイン配合錠は、世の中への影響があまりに大きかったので、「錠剤」と言っただけで通じる。このような特別扱いを受けている錠剤は他にない。一九六〇年代の経口避妊薬の導入は、重大な転機だった。性行為と生殖との分離を可能にしたからだ。人々は、セックスを控える必要もなしに、もうける子供の数を減らすことも、子供をもうけないことも選択できるようになった。効果的な避妊のおかげで、ウッドストック・フェスティバルから同性愛者の権利運動にまで及ぶ、性の革命が起こった。ピルは、婚前交渉や婚外交渉、その他多くの性行動に関する従来の道徳観に、一挙に疑問を投げかけた。フェミニストは、女による性的快楽の追求を、自立性を高めることの一環と見なし始めた。ジェンダー・ロールの変化も、ピルの導入に元をたどることができる。子育ての大半を女が行なっていた社会では、子供がいなかったり、ほんの数人しかいなかったりすると、女が家庭にとどまる必要性が低下した。一九七〇年代には、ピルに対する道徳的な制限（たとえば、未婚の人の使用禁止）が撤廃されたあと、女は大挙して労働市場に参入するようになった。

私が母の胎内に宿る前にピルが存在していたら、私は今ここでピルについて論じていなかったら

う。両親は子供を大勢持ちたくなかったが、オランダの「カトリックの南部」として知られる地域に暮らしており、ここでは教会が途方もない権勢を振るっていた。そして教会は、どんな種類の家族計画にも反対だった。私の家族の間では語り草になっているのだが、母は六人目の子供を産んでほどなく、家を訪ねてきた司祭に怒りを爆発させた。その司祭は、コーヒーと葉巻でもてなされて心地好そうに座りながら、こともなげに「次」の話を持ち出した。彼はコーヒーを飲み終える間もなく追い出された。それ以後、我が家の子供の数が増えることはなかった。ピルの普及前から人々の態度はすでに変わり始めていたものの、ピルが登場すると、すべてが手軽になった。その後数十年で、私の故郷では家族の規模が急激に小さくなった。

こうして、人間の生物学的機能に少しばかり手を加えただけで、状況が一変した。ここから、生物学的側面を敵視する必要がないことがわかる。私自身は、味方と見ている。人類がピルを必要としたのは、妊娠を防ぐ最も理に適った代替策が、あまりうまくいかないからだ。私たちは、セックスをするのをあつさりやめたり、あるいは少なくとも断続的に我慢したりすることもできたはずだ。だがそれは、私たちのような好色な類人猿には無理な注文だ。それに、事に及ぶ前にいったん中断して考え、コンドームをつけるよう男に求めるような解決策は、当てにならないことがわかっている。これは、一つにはその場の勢いに流されてしまうからであり、また、妊娠する恐れのない側の性に下駄を預けることになるからだ。ピルはそのすべてを変えた。人間の生物学的特質には、生物学的な答えが必要だったのだ。そして、私たちが気分やメンタルヘルスへのピルの副作用を心配し始めた今もなっても、それに変わりはない。

私たちは動物であり、動物のカテゴリの中では、れいちょうもく霊長目に属している。人間は、チンパンジーとボノボの両方とDNAの九六パーセント（正確なパーセンテージは検討中）が共通であるのとちょうど同じように、社会・情動的性質も共通している。どれほど共通しているかははっきりしないが、私たちが思い込まされてきたよりも、隔たりははるかに小さい。多くの学問分野が好んで人間の独自性を強調し、私たちを祭り上げるが、その見方は現代科学とはしだいに相容れなくなってきた。もし人類が海に漂う氷山だとしたら、それらの学問分野は、私たちと他の種との違いという、光を浴びて輝く小さな頂上部分だけにこだわるように求める一方、海面下に隠れた広大な共通領域に目をつぶっているわけだ。それに対して、生物学と医学と神経科学は、氷山全体をしっかりと眺めることを選ぶ。人間の脳は比較的大きいにしても、構造と神経の化学的特質の点ではサルの脳とほとんど変わらないことを、これらの分野は承知しているからだ。人間の脳はサルの脳と同じ部品から成り、同じように機能する。

ノルウェーの国営テレビのインタビュウを受けていたときに、面白いことが起こった。共感能力の進化について論じていると、インタビュアーが、ついでにとでもいうように「カトリーヌは元気ですか？」と尋ねた。私は驚いた。拙著に出てくる類人猿について質問される分には、かまわない。語れる話はいつでもあるので。だが、カトリーヌは私の妻だ。だから、「おかげさまで、元気です」と答え、本筋に戻ることをお願いした。ところがインタビュアーは、「今、何歳ですか？」と、質問を続ける。「私と同じぐらいの歳ですけれど、それが何か？」と私は応じた。インタビュアーはびっくりした様子で、「えっ、そんなに長生きするんですか、類人猿は？」と言った。そこで、ようやくわかった。

インタビュアーは、カトリーヌが私の研究対象の一頭だと思っていたのだ。

そして、この誤解のもとに、はたと思い当たった。なにしろ私は、この時点での最新作の献辞にこう書いていたからだ——「私の好きな霊長類、カトリーヌに捧ぐ」と。

第 | 章

# おもちゃが私たちに ついて語ること

男の子と女の子と他の  
霊長類の遊び方

TOYS ARE US

How Boys, Girls, and Other Primates Play

あ　る朝、双眼鏡を覗き込んでみると、アンバーが島に歩み出てきた。奇妙に体を折り曲げ、片手  
と両足で、よたよた歩いてる。残る手で、柔らかい箒はちまきの穂先の部分を腹に押し当ててるように  
して抱え込んでいた。生まれたばかりであまりに小さく、あまりに非力で、自分ではしがみつけない  
赤ん坊を、類人猿の母親が抱えているところにそっくりだ。目の色（琥珀色）にちなんで名づけられ  
たこのチンパンジーは、バーガース動物園のコロニーで暮らす青年期の女だった。飼育員の一人が、  
うっかりその箒を置き忘れたのに違いない。そして、アンバーが柄えを引き抜いたのだ。彼女はときど  
きその穂先をグルーミングし、母親が少し大きくなった子供を運ぶときのように、腰の上に乗せて、

手をつきながら歩き回ることもあった。夜にはそれを抱えて、藁わらでできた自分の寢床で身を丸めて眠るのだった。彼女はその箒の穂先を何週間も手放さなかった。もう、他の女が産んだ赤ん坊の世話を、母親になったつもりでしなくてもいい。今や自分の赤ん坊が手に入ったのだ。ただし、本物ではなかったが。

類人猿は人形をおもちゃとして与えられると、二通りの反応を示す。もし男の子が人形を手に入れると、引き裂いてしまいかねない。それはおもに、中に何が入っているか見てみたいという好奇心からだ。取り合いが原因のこともある。二頭の男の子が一つの人形を引っ張り合えば、ちぎれてしまいうる。男の手にかかると、人形はめつたに長持ちしない。一方、女が人形を手に入れると、すぐに我が子にし、優しく扱う。そして、大事に世話をする。

あるとき、ジョージアという名のチンパンジーの女の子は、何日も持ち歩いてきたデディベアを、屋内の区画に持ち込んだ。私は彼女をよく知っていたので、その人形を抱かせてくれるか確かめてみたくなった。そこで、一方の手を広げて懇願するように差し出した。これは、チンパンジー自身が見せる、ものをねだるときの仕草だ。私たちの間には格子があり、ジョージアはためらっていた。彼女はクマのぬいぐるみを遠ざけたまま、私に触れさせない。そこで私は腰を下ろし、クマを持ち去ったりはしないことを示した。すると彼女は、クマを私の方に押しやりはしたものの、脚の一本をしっかりと握ったままだった。そして、私にクマを調べたり、クマに話しかけたりさせてくれたが、油断なくこちらを見つめていた。それでも、私が彼女の方にクマを押し戻した頃には、信頼を裏切らないこの行為のおかげで、私たちの間には絆きずなが結ばれ、彼女はクマをしつかり抱き締めながらも、私のそば

にとどまった。

霊長類についての文献は、人間の飼育下にある類人猿が、与えられた人形の世話をする様子の記述であふれている（ほぼすべてが女だ）。類人猿は、人形を引きずり回したり、背負って運んだり、授乳するように乳首に人形の口をあてがったりする。あるいは、手話をするゴリラのココのように、人形の一つひとつにおやすみのキスをし、それから、それぞれの人形どうしにもキスをさせる。

これまた手話のトレーニングを受けた類人猿であるチンパンジーのワシヨは、与えられた人形を身代わりにしたことがあった。自分の小さなトレーラーハウスに新しいドアマットが置かれているのに気づいた彼女は、ぞつとしたように飛びのいた。それから人形を手に取り、安全な距離を保ちながら、マットの上に放り投げた。そして、人形に何か起こるだろうかと、数分間、食い入るように様子を見守ったあと、ひったくるようにしてマットから取り上げ、念入りに点検した。人形に害がなかったと判断してようやく、落ちつきを取り戻し、思



人間の子供のおもちゃをサルに与えると、車輪のついた乗り物はおもにオスの子供の手元に、人形はメスの子供の手元に行き着いた。この違いは、オスが人形に関心がないことに起因していた。

いきってマットの上を通り抜けた。

親はおもちゃを選ぶことによって男の子と女の子を社会化すると言われている。自分の偏見を彼らに押しつけ、ジェンダー・ロールの型にはめると。これは、子供は白紙であり、環境がそれを埋め尽くすという考え方だ。たしかにジェンダーの多くの面は文化によって規定されるものの、すべ

てが文化で決まるわけではない。おもちゃはこの議論の要だから、考察のまたとない出発点になる。おもちゃ業界は、親に娘や息子が必要とするものを示してくるが、たとえ親が玩具店をまるごと一つ買い上げたとしても、どんなおもちゃを選ぶかを決めるのは、あくまでも子供たちだ。それが遊びの素晴らしきところで、遊ぶ本人次第なのだ。子供たちが何かの場面を再現したり、想像力を働かせたりしながら好きなように楽しむのをただ眺め、大人が彼らを型にはめるのではなく、彼らの好みに沿って大人がおもちゃを選んで可能性を排除せずにおくのが最善だ。

アメリカの型破りな心理学者ジュディス・ハリスは、親の影響を、ただの心地好い幻想と見ていた。そして、一九九八年の著書『子育ての大誤解』で、次のように推測している。「たしかに、親は息子にはトラックを、娘には人形を買うが、それにはもつともな理由があるのだろう。おそらく、子供たちがそれを望んでいるのだ」<sup>(3)</sup>

**赤**ん坊に見立てた箒と過ごすアンバーを眺めていると、彼女が人形を欲しがっていることは明らかだった。これは、霊長類のメスにはありがちなことなのだろうか？ これまで科学者がサルにおもちゃを与えたときには、サルの選択は断じて性別に無関係ではなかった。二〇年前、この種のものとしては初めてカリフォルニア大学ロサンゼルス校で行なわれた実験では、ジェリアン・アレクサンダーとメリッサ・ハインズがサバンナモンキーに、パトカー、ボール、ぬいぐるみの人形、その他いくつのおもちゃを与えた。たしかにこれは、作弄的な状況であり、これらの物がサルにどん

な意味を持ちうるかについて、じつに多くの仮定に基づいていた。私は、人間の問題を動物たちに投げかける人間中心の傾向の実験よりも、動物たちの実際の行動に着想を得た実験のほうが優る（まさ）と思つている。とはいえ、二人の実験結果を見てみよう。

サルたちは、人間の子供の性別に基づく好みをなざる反応を見せた。自動車などの乗り物のおもちや、オスが扱うことが多く、彼らはそうしたおもちやを地面の上で動かした。オスたちはボールも好んだ。一方、人形はメスが手に取ることのほうが多く、メスたちは人形を持ち上げてぎゅつと抱き締めたり、股ぐらをしげしげと眺めたりするのだった。後者の動作は、新生児の生殖器に対するサルたちの好奇心と一致する。子を産んだばかりの母親の周りにメスたちが集まり、揃つて小さな唸り（うなり）声を上げたり、唇を打ち合わせて優しい音を立てたりしながら、身もだえする赤ん坊（あかご）の両脚を拡げ、股間をつついたり、引っ張ったり、匂いを嗅いだりするのは、珍しいことではない。サルはみな、体のこの部分が重要だと考えているようだ。霊長類は、長い間そうしてきた。人間が胎児（たいじ）の性別を発表する「ジェンダー披露（リベール）」パーティを思いつくよりもはるかに前から。

カリフォルニア大学のその研究では、おもちやを全部一度に与えたわけではなかったもので、サルたちは本当の意味で選ぶことはできなかった。わかるのは、彼らがそれぞれの種類のおもちやでどれだけ長く遊んだかということぐらいだ。ジョージア州アトランタ近くのヤークीड国立霊長類研究センターのフィールド・ステーションで行なわれた、アカゲザルを使った別の研究では、この不備が正された。私はこのセンターで勤務しているので、毎日そのサルたちのそばを通る。彼らは一年を通して、屋外の広いフェンスの囲いの中で暮らしており、そこでやかましく喧嘩したり、集まってグルーミン

グをしたり、乱暴な遊びをしたりしている。やることはいくらでもあるとはいえ、新しいおもちゃにはすぐに気を惹かれる。エモリー大学の私の同僚キム・ウォレンと、彼が指導している大学院生のジャニス・ハセツトは、一三五頭のサルに二種類のおもちゃを同時に与えて、どちらを選ぶかを調べた。与えたのは、人の形をしたものなどの柔らかいぬいぐるみと、自動車などの車輪のついたおもちゃだった。

サルのオスたちは、車輪のついたおもちゃを選んだ。オスのほうが好みが偏っていたのに対して、メスは自動車も含め、すべてのおもちゃが気に入った。オスがぬいぐるみに無関心だったので、そのほとんどがメスの手に渡った。人間の子供もそれに似たパターンを示す。男の子のほうが、おもちゃの好みがはっきりしているのだ。男の子は女性的に見えてしまわないか不安になるが、一方、女の子は男性的に見えることをそれほど心配しないから、というのがありふれた説明だ。だが、サルがジェンダー認識を気にかけるという証拠がないので、人間の男の子が抱くとされるのと同じ不安をサルたちが感じるとは考えづらい。現実はずっと単純で、単に人形はたいいていの男の子にも霊長類のオスにも魅力がないのかもしれない。

これらの実験の設定は奇妙だった。なぜならサルたちに、馴染みのない人工物を与えたからだ。この欠点は、とくにトラックに当てはまる。プラスチックや金属でできた色鮮やかな乗り物のおもちゃは、彼らの自然界の生息環境にあるものとは似ても似つかない。サルのオスは、ボールや自動車のように、行動を誘う、動かせるものに魅了されたのか？ オスはエネルギーのレベルが高く、体を動かす遊びが好きだ。メスが抱き締めることのできるぬいぐるみで遊んだ理由は、もっと簡単に説明で

きる。人形には胴体や頭や手足があり、見た目が赤ん坊や動物に似ていたからだ。サルのメスは、死ぬまで赤ん坊を養育しながら過ごす、オスは違う。

私自身は人形で遊ぶことはまったくなかった。母が私たち兄弟のために、いつもいくつか人形を用意しておいてくれたのだが。私は大きなブルドッグのぬいぐるみが気に入っていたものの、いっしょに寝ることはなかったし、ボクシングの腕を磨いているときには殴り飛ばしもした。私が遊びによく使ったのはクレヨンと紙で、それは、絵を描くのが好きだったからだ。それから、建設機械などの組み立てセットや電動の列車のおもちゃなどだ。だが、圧倒的に興味があったのは、動物だ。いつ、どうして関心を持ったのかはわからないけれど、ごく小さい頃から、カエルやバッタや魚を捕まえていた。幼いコクマルガラス（カラス科の小型の鳥）たちや、巣から落ちたカササギも一羽育てた。土曜日にはたいいてい、手製の魚網を持って自転車で水路に行き、サンショウウオやイトヨ、シラスウナギ、オタマジャクシ、タナゴなどを捕ったものだ。全部を生かしておくのが目的だった。けつきよく、家の裏手の物置小屋はミニ動物園と化し、そこには水槽が並び、増える一方のマウス、鳥たち、私になつた猫が一匹、暮らしていた。犬は飼っていなかったものの、仲良くなった近所の大型犬がしょっちゅう身近にいた。動物といっしょにいることも、彼らの匂いも好きだった。それは今も変わらない。そのような興味は、遊びを通した社会化の尺度の、どのあたりに位置するのだろうか？ 自動車のおもちゃに似て、動物たちは動くが、人形と同じで世話も必要だ。家族は、私をこの方向に押しやつたわけではないし、私のがめり込むのを大目に見てくれたと言うのがせいぜいだから、私は事実上、「自己社会化」していたのだ——自己だけで社会化するというのは、言葉の矛盾のようではあるが。

私は動物たちのことや、初めて手に入れた水槽をどう仕上げるかや、幼いコクマルガラスたちをどこで放すかを夢見たものだ。私は動物愛好者になる道をまっしぐらに進んでいき、それが現在の職業の基礎を固めることになった。動物への愛着心は、ジェンダーで決まる問題ではけっしてない。大人にも子供にも男女を問わず見られるからだ。そしてまた、私は自分の興味が十分男性的かどうか思い悩んだ覚えはまったくない。

ジェンダー平等を公式に促進しているスウェーデンは、かつてあるおもちゃ会社に圧力をかけ、クリスマスのカタログに、バービー・ドリームハウスで遊ぶ男の子たちと、銃やアクシオンフィギュアを持った女の子たちを登場させた。ところが、スウェーデンの心理学者アンダーズ・ネルソンが、三歳児と五歳児におもちゃを見せてもらおうと、カタログとは裏腹の結果が出た。ほとんどの子も、自分の部屋に平均で、なんと五三二ものおもちゃを持っていたが、一五二部屋で合計何万ものおもちゃを分類したネルソンは、子供たちのコレクションが、他の国々の場合とまったく同じステレオタイプを反映している、と結論した。男の子のほうが道具や乗り物やゲームが多く、女の子のほうが家庭用品や育児用品や衣類のおもちゃが多かった。彼らの好みは、スウェーデン社会の平等精神の影響を受けていなかったのだ。他の国々で行なわれた調査も、親の態度がおもちゃに対する子供の好みにほとんど、あるいはまったく影響しないことを裏づけている。<sup>(8)</sup>

男の子は何でも銃代わりにし、人形を武器に変えて振り回し、ドールハウスを立体駐車場にし、(キッチンセットとして与えられた)鍋や釜を、「ブルーン! ブルーン!」と声を出しながら、カーペットの上で自動車のように動かす。男の子の遊びは、とにかくやかましい! 自動車や銃撃の音を真似

て大きな声を出すのが大好きで、それは女の子が遊んでいるときには、まず聞かれない種類の声だ。最初に発した言葉が「パパ」でも「ママ」でもなく「トラック」だった子供を、私自身も知っている。彼はその後、誰に教えられたわけでもないのに、祖父母のことを乗っている車のメーカー名で呼ぶようになった。

遊びは無理やり押しつけることはできない。女の子におもちゃの列車を与えたら、そつと揺すつて眠りに就かせるふりをしたり、ベビーカーに乗せて毛布を掛け、押して回ったりするかもしれない。ペットの犬の場合と同じだ。犬に新しい高価なおもちゃを買ってかえっても、古靴を噛みしだいたり（古靴ならまだましなほうだ、私たちがキッチン<sup>の</sup>床にうっかり落としたりしたコルク栓を追いかけたりする）このほうを好む。

アメリカのサイエンス・ライターのデボラ・ブラムは、子供がやりたい放題に遊ぶ頑固な傾向を心中で嘆いている。

息子のマークスは、おもちゃの武器をやたらに欲しがる。銃はどうしても我慢がならない母親に、プラスチックのちゃちなピストルの一丁も持たせてもらえないので、粘土からキッチン用品まで、何でも兵器にして埋め合わせてきた。「あいつを歯ブラシで撃て！」と叫びながら、猫を追いかけて家の中を走り回っているのを目で追いつつ、私は思わず頭の中で両手を挙げて降参した。

人間の性とジェンダーに関連した一般的な用語

用語	定義
性 (sex)	ヒトの生物学的性。生殖器の構造と性染色体(女はXX、男はXY)に基づく*。
ジェンダー (gender)	社会の中で文化的に定められた、それぞれの性の役割と立場**。
ジェンダー・ロール	生まれと育ちの相互作用に起因する、それぞれの性の典型的な行動や態度や社会的機能。
性自認 (性同一性、ジェンダー・アイデンティティ)	自分は男である、あるいは、女であるといった、人の内面的な感覚。
トランスジェンダー	性自認が生物学的性と一致しない人のことを指す***。
トランスセクシャル	ジェンダー適合のためのホルモン治療と手術の両方あるいは一方を受けた人のことを指す。医学用語。
インターセックス	解剖学的構造と染色体とホルモンプロファイルのすべて、あるいは一部が、男／女のバイナリーに適合しないため、生物学的性が曖昧か中間的である人のことを指す。

\* これは、ヒトの性の医学的定義。生物学では、性は(精子や卵子などの)配偶子の大きさで定義される。メスのほうが大きな配偶子を持っている。

\*\* アメリカでは、「ジェンダー」という言葉は、しだいに生物学的性を指して使われるようになっており、それには動物の生物学的性さえ含まれるが、それは本来の意味ではない。

\*\*\* 性自認と生物学的性が一致しているときには、その人は「シスジェンダー」であると言われる。

## 訳者あとがき

**本**書は、アメリカの動物行動学者フランス・ドゥ・ヴァールの *Different: Gender through the Eyes of a Primatologist* の全訳だ。本文冒頭に書いたとおり、用語について著者から要望があったので、それについて、まず触れておきたい。これまでの作品ではなかったことだが、本書が各国語に翻訳されるにあたって、次の三つの指示が出た。

第一に、類人猿とサルを厳密に区別すること。類人猿は尾のない大型の霊長類であり、チンパンジー、ボノボ、ゴリラ、オランウータンと、テナガザル科の動物が該当する。一方、サルは尾のある小型の霊長類であり、本書に出てくるヒヒやサバンナモンキー、アカゲザル、オマキザル、マンドリルなどが含まれる。純粹に生物学的な分類については、これまでの作品でもすでにそのように訳してきたので、今回もそのままその方針を踏襲してある。

第二に、類人猿を指すときには、「which」や「it」に相当する語ではなく、「who」や「he」や「she」に相当する語に訳すこと。これまた、これまでの作品でもすでにそのように訳してきたので、

今回もそれに倣っている。

第三に、類人猿と人間の性別を表すときに同じ単語を使うこと。英語で性別を表す「male / female」は動物にも人間にも使えるが、日本語のように通常は別の単語を使う言語があるのは著者も承知のうえであり、たとえ不自然になってもそうするように、とのことだった。普通は人間の性別に使う「男／女」と、動物の性別に使う「オス／メス」のどちらを選ぶかについて確認すると、「オス」や「メス」を使うと侮辱的に感じる人が出てくるだろうから、人間に用いる言葉を使うように、という返答をいただいた。そこで本文中では、人間の性別に「男／女」を使うだけでなく（ただし、熟語や著者以外の言葉では「男性／女性」も使っている）類人猿のオスも「男」、メスも「女」と呼んでいる。一方、その他の生き物を指す場合や、類人猿も含めて霊長類や動物全般を指す場合、著者以外が引用などで類人猿を指す場合には、「オス／メス」を使っている。

さて、前二作ではそれぞれ動物の知能と情動を取り上げた著者が、本書のテーマに選んだのが、ジェンダーだ。ここでもまた、用語について述べておく必要がある。「ジェンダー」という言葉はさまざまな意味で使われるが、邦訳では六三ページの用語一覧にある「社会の中で文化的に定められたそれぞれの性の役割と立場」という定義や、「言わば学習によって身につけたメッキであり、生物学的な意味での女を社会・文化的な意味での女に、生物学的な意味での男を社会・文化的な意味での男に変える」という著者の記述、「社会的に構築された、女性、男性、女性、男性、女児、男児の特徴」という世界保健機関の定義に基づいてこの言葉を使い、生物学的な性とは区別する。したがって、人間の胎児にはジェンダーはないし、たいていの場合、動物にもジェンダーはなく、人間が場所や時代に関係なく

示す特性や、動物と共有している特性は、ジェンダーよりも生物学的な性に由来する可能性が高いという立場をとる。

本書の内容は多岐にわたり、詳細は本文に譲るが、とくに注目に値するのが、人間社会でのジェンダー不平等と、男性優位は自然の秩序であるという旧来の見方だ。ここで動物行動学者である著者の経験と知見がおおいに役立つ。なぜなら動物、とくに私たちに近い霊長類は、人間の真の姿を映す鏡の役割を果たすからだ。その鏡を虚心に覗けば、私たちが見落としていたものや目を背けてきたものがそこに見てとれる——二重の意味で。

一つには、人間も動物であること。霊長類、わけでも類人猿を眺めれば、人間との類似性を思い知らされる。私たちはややもすると人間を特別視するとともに、心身二元論に陥って心や魂を讚美し、肉体を卑しく汚らわしいものとしがちだ。だが、現実が生物学的特質を抜きにしては語れない。

そして、私たちの持つ先入観や偏見も明らかになる。人間が自ら作り出した価値観や規範に縛られていることが見えてくる。ジェンダー・ロールの捉え方や、それと密接に結びついている考え方、たとえば、権力は身体的優位性に基づくとか、人間の歴史は争いに尽き、暴力による支配が自然の掟であるといった考え方がその好例だ。

霊長類ばかりか、その他の哺乳類や鳥類にさえも見られるものと類似した行動を人間もとつていれば、それは人間固有の特性や文化の産物とは言い難い。逆に、普段は当然視していることも、そのような類似がいつさい見つからなければ、人間に特有の要因が働いている可能性が高い。動物という鏡には、私たちが自らの生物学的な性やジェンダーによる違いなどを見直す手掛かりが豊富に映ってい

るのだ。

霊長類学という学問分野そのものが、先入観や偏見に満ちた社会の縮図になっていたことも興味深い。この分野も、以前は強い男尊女卑の風潮があり、それを反映してオス優位の考え方が浸透していて、オスによる力任せの支配や争いばかりに目を向けがちだった。その霊長類学が、今では動物たちの協力や和解、メスの政治的権力などにも注目するばかりか、真に機会均等な数少ない科学分野の一つとなっているというのも示唆に富む。それは、この分野が女性にも開かれていて、部内者が自らを映す鏡を日頃から覗き込んでいることとけっして無縁ではないように思える。

ご存じの方も多いだろうが、著者は今年（二〇二四年）の三月一日に七五歳で亡くなった。胃癌だったそうだ。著者の作品を訳すときにはいつもするように、昨秋、語句の意味や解釈などについての質問をした。そのときにはもう、具合が悪かったのかもしれないが、そんなことはおくびにも出さず、いつもの淡々とした調子で親切に答えてくださったので、訃報に接したときには、まさに寝耳に水の感があった。

著者が自らを便器の中のカエルになぞらえていた時代（第四章参照）が過去のものになったのは幸いだし、著者はこの変化に自分も貢献したという誇りと自負を抱いていたことだろう。それでも、長年の連れ合いである最愛のカトリーヌさんや動物たちともっともっと時間を過ごしたかったに違いない。動物たちを鏡として映し出すテーマは尽きず、執筆材料にはまだまだ事欠かなかったはずでもある。心から追悼の意を表したい。

最後に、お礼をひと言。今回も版權交渉をまとめ、翻訳を任せてくださった紀伊國屋書店出版部の和泉仁土さん、編集全般を受け持ってくださいだった同出版部の塩野綾子さん、デザイナーの芦澤泰偉さん、五十嵐徹さんをはじめ、刊行までにお世話になった大勢の方々に深く感謝申し上げます。

二〇二四年一二月

柴田裕之